

「宮脇賣扇庵」を訪ねて

宮脇祥三さん、宮脇恵子さんにきく

(株式会社宮脇賣扇庵専務取締役)

(株式会社宮脇賣扇庵取締役
70年女子高等学校卒業)

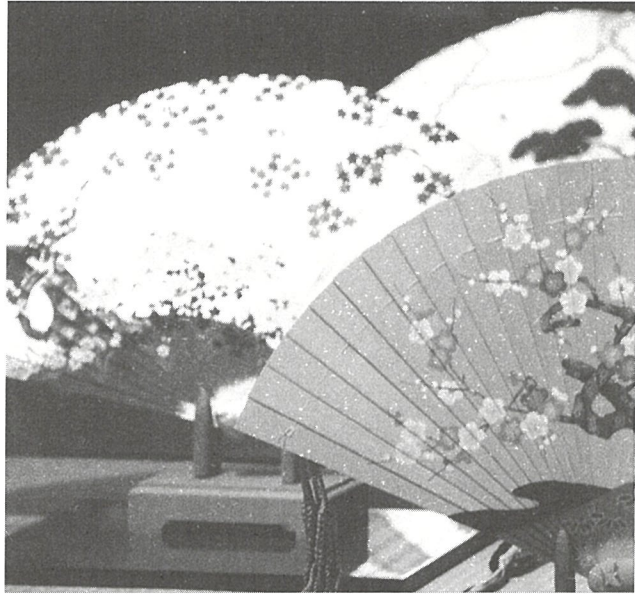
「賣扇庵」の由来

廣瀬 私どもも京都に住まいをしています、六角堂の前を東へ向かいますと、古い伝統のあるこちら様のお店が目をはきます。江戸時代後期文政六年でございますか。古いご創業と伺っておりますが、何か創業の頃について伝わっているお話がございますたらお聞かせ下さい。

宮脇(祥) 創業は文政六年です。手前の方の出身地は岐阜なんです。岐阜から初代が京都へ出てまいりました。当時は江戸末期でも勝手に商売ができないんですね。町内とか株組織があっ

ききて
廣瀬千紗子
(女子大学文学部教授)





ひょうぎ 櫛扇 (扇の原形。四季おりおりの柄が描かれ、現在は装飾用として用いられる)

てこの町内で商売をしたいと言うと、認可を受ける。鑑札も残っています。

そうして扇子の株を買ったわけです。もとは「近江屋」という屋号でした。手前どもの初代が「近江屋」を継いで、それが新兵衛と言いました。「近江屋」新兵衛で開業したわけです。本来なら岐阜なので美濃屋とするところですが、それ以前のことは近江屋の分家も何もないのでよくわかりません。最初に出てきた人が初代になっています。これが文政六年です。「近江屋」という扇子屋はもう少し古いらしいです。

廣瀬 ずっとこちらの場所だったのでしょいか。

宮脇(祥) この近辺だったようです。このへんも焼けておりますのでね。定かでないんですが、六角通りの、「六角さん」の参詣のための門前に店があったのでしょうね。

廣瀬 六角堂は大変古いお堂でございますからね。

宮脇(祥) お参りになる参詣人のために、このへんに扇子屋の集落があったようです。「藤田団扇堂」というのがありました。割に古かったです。お寺さん、専門店もありました。それを売り払って山科に移って、今は廃業されたと思います。何軒かここにあったようです。京都ではこのへんと、千家さんのある小川寺の内、そして五条と扇子屋の集落は三カ所くらいあったと聞いております。城殿派と阿弥派という大まかな流れがありました。そんなようでした。

この当時は城殿が京都では有名だったようです。

廣瀬 こちらの屋号は明治十六年刊の『都の魁』^{みやぎのき}に、扇子の形をした看板というか、広告が出ています。「紅梅軒」として富岡鉄斎の命名だと承っていますが、お親しいご関係でしたか。

宮脇(祥) 富岡鉄斎先生は割合、どこでも看板を書いておられます。ずいぶんご昵懇にさせていただいたようです。「宮脇賣扇庵」という屋号をつけた由来があるんですが、私も人に指摘されて、「こんなのが書いてあるけど」と、ごく最近「紅梅軒」とあるのを知って、年寄りもないので聞く人もなく、なんぼ調べても出てこないんです。四条と三条の間へんに、有名な桜があった。その桜の名前が「賣扇」というので「賣扇庵」と付けたということです。古い文献には、当時のことを書いたものが



宮脇祥三さん

あります。

三代目の時に鉄斎先生から「賣扇庵」という名前を付けていただきました。襲名で代々新兵衛を継いでおります。今年（一九九八年）の九月に五代目が亡くなりましたが、直系は同志社を出ました宮脇恵子です。それを社長にすべしだったんですけど、どうも景氣の情勢の中で女社長はまだまだ生きにくいからということ。私の兄で恵子の叔父が、名前は新兵衛は名乗らずに六代目の社長に最近、決まったところです。前社長の娘恵子は副社長になっております。

廣瀬 六代、お続けになって来たわけですね。

宮脇（祥） 現在ではね。まだ百七十五、六年です。京都ではまあまあというところですね。

扇作りへの思い

廣瀬 六代もお続けになりますと、いろんなことがおありだと思えます。扇は京都を代表する伝統工芸品でございますし、実用的な用途以外に、舞扇とか、お茶の席とか伝統芸能にも用いられます。末広がりでもありおめでたい席には必ず使わせていただく

ものです。今までにお作りになってきた扇に関して、思い入れとか何かお気持ちを含められていることがございますでしょう？
宮脇（祥） 古い商売なんですけど、ご墨屑のお客さんもおいでで、こんな不景氣でも、芸能関係、お茶、踊り関係には必需品です。そう廃れるものではなく、年々、若干でもそういうものが増えてきています。それも一つは同業者の淘汰があるのかもしれない。職人の数も減りますし、今までよそで作っていたのがやりにくくなって、こちらに回ってくるのが若干あると思います。ある一定の決まったお客様もございます。普通のあおぐ扇子も売れるんです。これは氣候と景氣に左右されます。今の不況では企業関係がごそつと宣伝を控えますのでね。減ってまいります。天候が悪いと、小売り屋さん、百貨店が冷え込みますし。仕入れも減るわけです。今まで十買うのが一つになったりね。発送するのは同じような手間がいりますし。そういう悩みはありますけど。

おかげさまで古臭い商売なので、景氣がよくてもそんなに目立って売上が上昇することはないですが、悪い風でも落ち込むこともないんです。いいものを求めるお客さんが多いです。ちゃんとしたものを作っていれば、お客さんは見捨てられません。そういう信条で一生懸命にいいものだけ作つたらいいから、私はこれで行くという考えでね。直接、絵描きを呼んで、割に細かい指図していますけど。

廣瀬 私どもも折角求めるのでしたら、この際、いいものとなりまします。お店の作品を拝見していますと、手が出ませんけど、見せていただくだけでも美術品のようです。美術館で作品

を見るのとは違いまして、実際に手に持つて使えるもののなので、そういう点で愛着が大分あるように思います。きれいだけど、近づき難いではなく、身近に置いて使えるのは嬉しいことです。扇は折り畳むと小さくなりますが、開けますと画面が広がります。考えてみたら、扇は機能的な一本の小さなものでありながら、ひとつの世界を畳み込んでいる。これは非常にいいものやなと改めて感じました。

宮脇(祥) 大体、図柄に作家の名前が入っていないんです。これは職人さんと加工する人、我々が一体で作りますので、壁にかけて眺めることもできますが、誰かの作品として眺めるより工芸品として眺めるのが私は好きなんです。もちろん、図柄がよくないとダメですが、同時に開け締めとか、持った感触、工芸品の要素を私たちは重要視します。無地でもいいんです。これはいい扇子やなという扇子がいいんです。図柄はいい方がいいんですけど、手に馴染むとか、機能が大分左右されます。当然、高い絵代のものと、職人も、よりすぐったものを使うとか。いいものはできるんですが。確かに機能は面白いですが、**廣瀬** 個人の使用に使えて、自分の扇子として持つて歩けるの



宮脇恵子さん

がうれしいですね。それでも作りは漆が塗ってあったりして立派です。象牙は手が出ませんが、自分のものとして持ち歩ける。今ときには贅沢なものではないかなと思います。子どもの頃にも、きれいな絵を描いた扇子を持たせてもらって、いい匂いがついていた。夏の浴衣と扇の匂いの記憶が結びついています。今はこういうものを一本持つて歩くと、ずいぶん気持ちよくなりそうです。

宮脇(祥) お見えになるお客さんが、感触で選ばれる。お値段はそれほどなくても、きちつと仕事がしてあればという。**廣瀬** 今、古い伝統的なものを手に持てるのは贅沢だなと思いますが、もう一つ面白いなと思いますのは、扇面の形を画面として、その中に描くということです。絵が扇という範囲の中で描かれる。キャンバスとして。

宮脇(祥) 扇面という慣れない作家は戸惑われるようですね。日本画の先生方は慣れておられますけど、洋画の先生方は「描きにくいな」とおっしゃるんです。「こんなのは初めてやけど面白いもんなや」と。扇面は制約があつてやりにくいものやなと。ただ扇面に描く場合と、扇子になってからを頭に入れて描く方と両方あります。扇子にするのが前提ですので、一本の線でも考えてお描きになる。こうなるんだなと構図をとられるようです。扇子になつてから描く場合は別ですけど、慣れないとなかなか扇面にはまりこまないようです。富岡鉄斎は扇子に仕上げてから描いています。折り目に絵の具が溜まるのが面白いといつて。古い作品を見ますとそういうのが多いです。専用の紙に鉄斎の名前の透き込みがありましてよく描いていたようです。



廣瀬千紗子さん

廣瀬 時々屏風に張りませてあつたりするのを拝見しますが、何枚か張ってしましますとまた別の感じですよ。

宮脇(恵) いっぺんに何枚か見られますし。案外保存がききます。古い作品はほとんど残ってないんですが、扇面を張りまぜるので残ります。扇は使うので消耗品ですから擦り減ってきます。傷まない間に骨を取って屏風に張って。それが残っているようです。

時代を見据えた扇作り

廣瀬 先程、扇に描かれる絵の話を伺いましたが、扇向きの題材に決まったものなどはあるのでしょうか。

宮脇(恵) 女性には特に、抽象的なものより秋の七草とか風景とか具象的なものが多いですね。男性はワンポイント的なものが多いです。着物の柄の裾模様のようなものとか。華飾を施しますと、さらびやかになりますので、グレードがどんどん上がっていきます。私たちが見てきれいだなというのは、私たちの年代には好まれるのではないかと思って取り入れています。

廣瀬 お若い方は最近、扇子はお使いですか。

宮脇(恵) 若い方が、母の日にお母様へ贈り物にお買い求め下さいます。私たちのような年代ではこんなのがいいのかなという扇子です。可愛らしい、可憐とか、お母さんの好きな花だからという感じでお買い求めいただきます。今は布の扇が出てきて、ハンカチやワンピースとお揃いものがあります。扇子の下に房がついてファッショナブルです。

廣瀬 和服を着た時に使いやすいというより洋装の時に似合うものですね。

宮脇(恵) 扇子が数年前からブームになって、DCブランドが出ています。チューリップとか決まった柄でトレードマークのものが多いです。

廣瀬 現代風の若い方々が使われるもので、こちらのお店で一定のものはございますか。柄とか色とか。

宮脇(恵) 柄以外に扇子を入れる袋、下に紐のようなもの、エンプレムのなものに凝りまして、ピンクの袋にピンクの地の扇子を合わせるとおしゃれになりますので、そんなトータルなファッションを心掛けています。

宮脇(祥) それが僕はあきませんね。年寄りはずレましてね。年代の若い人と、若い絵描きさんの感覚ですね。私はオーソドックスなものを考えます。それはそれでまた需要があります。

廣瀬 扇を持ち歩きますと、現代の生活ではがさつですので、傷めたり、破ったりしないかと気になります。ケースとセツトですと、心おきなく使えていいですね。

宮脇(祥) 贈答にもまとまっていますし。

廣瀬 エアコンが普及していても扇子を持っているのがおしや

れて、若い方も時々、グッズとして持っているのを見かけることがあります。新しい製品をお考えになる時は、自然にいいデザインと結びついていくものでしょうか。

宮脇(恵) 形自体が完成されたものですから、その画面の中でアレンジするしかないんです。片面と両面の違いくらいですが、後は色、柄でしかないのです。いつ完成されたのかよくわかりませんが、とってもシンプルで完成されたすばらしいものだと思います。

廣瀬 制約とも言えますけど、型が決まっています、その中でうまく収めるのは長年蓄積された知恵で、帯などでもそうですが、伝統の型にはめていくと自然にきちっと収まっていくのはすばらしいと思います。『都の魁』を拝見しますと、絹張りの扇などもあります。紙製のとは違いますか。

宮脇(祥) その当時は絹オンリーでしたでしょうね。綿の場合は今のように薄手のものがないので、絹が一番薄い素材です。ナイロンなどない時ですから。布扇を絹扇と書いていると思います。今も高級品は絹を使っています。

廣瀬 白檀や香木は昔から扱っておられますか。

宮脇(祥) やってますね。最近、力を入れてやっています。

廣瀬 普通の扇と同じように使うのですか。特別な用途はあるんでしょうか。

宮脇(恵) ないんですけど、中国製はよくご覧になったことがあると思います。ミシンで抜いたような。私のところのオリジナルは、白檀、紫檀と黒檀と沈香と四種類で、京都に一人しかない職人が作っております。画面が透けない部分に金泥、銀

泥をほどこします。

宮脇(祥) 一つずつ削って仕立てますので、生産も少々ございますしオリジナルでよそにはないものですので、高価なものになります。

廣瀬 それは豪華ですね。お仕舞いや日本舞踊に使う柄は決まったのですか。

宮脇(祥) お仕舞いは特に決まっていますね。踊りもほぼ決まっていますが、その時の衣装とか背景で踊る先生方の好みが入ります。思ったより柔軟な考えで、去年と違うものをとおっしゃることもあります。お仕舞い、お能みたいにきっちり決まっていないみたいです。

廣瀬 能とかお仕舞いは流儀によるでしょうね。

宮脇(祥) そうですね。踊りでも一番に衣装が決まりまして、背景が何で。こういう雰囲気やからこういう扇子を使うと、先に頭に入れてご注文になる。決まったものでもそれをアレンジされます。

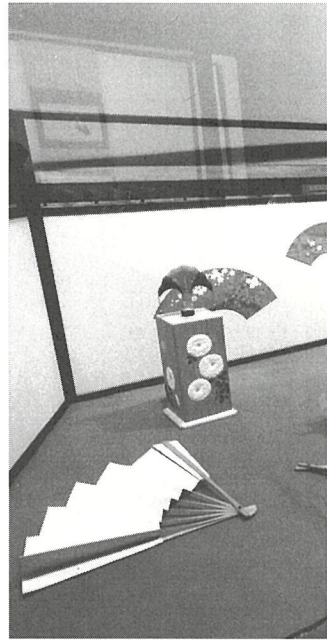
廣瀬 能とかお仕舞いとか舞の約束ごとの世界から、若い方のおしゃれの扇まで範囲が広がりますが、毎年、新作をお考えですか。

宮脇(恵) 三月くらいまで毎年、男性用と女性用をそれぞれ二百柄くらい四百ほど作ります。理由は知りませんが、紅(べに)と呼ぶんです。

宮脇(祥) 符丁やね。夏の扇ぐ扇子を紅と言います。

宮脇(恵) 今年の紅にしようかと。

宮脇(祥) うちのだけの符丁かもしれないけど。夏の扇子は定番



とうせんきよう
投扇興

ねと。男性用の方がいいとか、地色が赤い方、白い方がいいとか。
廣瀬 見るもの、聞くもの扇子に結びつくわけですね。

宮脇(恵) ええそうです。

廣瀬 お店の方にも飾ってありますが、だいぶ以前に結婚祝いに投扇興を二、三人に差し上げたことがあるんです。華やかですし扇やから末広がりでもいいだろうと。実際に、遊戯として遊ばれる方はいらっしゃいますか。

宮脇(祥) 最近多いんです。家元と称されて大津のお寺に流派があるんです。大体、ルールは決まっていますが、近年流行っているようです。

が何点かありますが。それ以外は去年まで、今年は新しいものと変えるわけです。わりと大変な作業です。
廣瀬 それはびっくり致しましたですね。お古い家なので、決まった柄が固定しているのかと思っていましたね。
宮脇(祥) 決まった柄はそんなにたくさんないね。五十点はあるかもしれないけど。

宮脇(恵) 四百種類と言いましても、吹き寄せとか波などのような定番がありますから、それを多少変えたり。

宮脇(祥) 全部コロツと違うデザインばかりではないんです。ススキに秋草、虫がいるとか。そうむちゃくちゃ多いわけではないんですけど。

廣瀬 常に何かデザインを探して。いつも頭の中におありになつて。

宮脇(恵) それはたまたま私、好きなんです。いいなと思う柄をみつけると切り抜いて。この柄だからこの形の扇子の方がいい

廣瀬 そういうことになっているとは知りませんでした。おもしろいですね。いいものを持ちますと大事にしようという気持ちが起きますので、私どもでも自然にものの値打ちに合うようになっているわけばいいなと思います。今後とも夏になりましたら、毎年、古いものと新しいものを見せたいならありがたいと思います。

実は若い学生を連れて、時々お店の品々を拝見させていただいていますことを白状しておきます。本日はお忙しいところ、本当にありがとうございます。

(一九九八年「二月二日」宮脇賣扇庵」にて収録)